青森県近代文学館報

特別展「寺山修司没後三〇年」開催

会期　平成二十五年七月十三日（土）～九月八日（日）

近代文学館では、七月十三日から九月八日まで、特別展「寺山修司没後三〇年」を開催します。

寺山修司は、青森県に生まれ、詩・短歌・小説・戯曲などの文学活動に加え、前衛的な演劇活動を行い、社会に大きな影響を与えました。

昭和十年、青森県弘前市に生まれた寺山修司は、中学校時代から小説や詩、俳句を作り、ガリ版刷りの文芸誌「白鳥」を発行するなど、その早熟な才能を開花させます。県立青森高等学校在学中には全国の高校生の俳句雑誌「牧羊神」を発行しています。

寺山修司（藤巻健二氏撮影）

野脇中学校文芸誌「白鳥」
寺山修司が中学３年生の時に
中心となって編集・発行した

早稲田大学在学中に「チェホフ祭」で短歌研究新人賞を受賞、昭和四十一年には放送詩劇「山姥」でイタリア賞のグランプリに輝きました。寺山の率いる演劇実験室「天井桟敷」は昭和四十六年ベオグラード国際演劇祭において「邪宗門」でグランプリを受賞。以後、多彩なジャンルで数多くの作品を残し、昭和五十八年に四十七歳で逝去しました。

時代を疾走した寺山修司は、映画「田園に死す」のラストで主人公に「本籍地東京都新宿区新宿字恐山」といわせています。没後三十年にあたり、寺山修司とふるさと青森の関わりを中心に、寺山修司の文学活動と業績を紹介します。

目　次

・特別展「寺山修司没後三〇年」開催……1
・特別展「鳴海完造と秋田雨雀」開催の記録……2
・特別展記念「講演と朗読の会」……3
・全国文学館協議会共同展示「文学と天災地変」……3
・会津・斗南藩の概要（葛西富夫）……4
・企画展「斗南藩と文学」開催報告……5
・二人をつないだ津軽の血（加藤丈夫）……6
・企画展「加藤謙一と佐藤紅緑」開催報告……7
・新収蔵資料展「十人点描」開催報告……8
・第十一回青森県近代文学館川柳大会……8
・資料寄贈者紹介……9～11
・ギャラリートーク、今月の作家コーナー、館務日誌……12

平成二十五年度企画展

□企画展「北畠八穂生誕一一〇年」
四月二十七日（土）～六月九日（日）

青森市出身の児童文学者・小説家・詩人北畠八穂（一九〇三～一九八二）は、難病に屈せず、四十二歳で児童文学作家として出発し、逆境の中でも明るくたくましく生きる子どもの姿を描きました。生誕一一〇年にあたる今年、その生涯と文学活動、ふるさと青森への思いを紹介します。

□企画展「大町桂月が描いた青森」
十月十二日（土）～十一月二十四日（日）

大町桂月（一八六九～一九二五、高知県出身）は、多くの詩や評論、紀行文を発表した文人です。特に山水探勝の紀行文の大家として知られ「鉄脚の人」と称されました。明治四十一年には初めて十和田湖を訪れ、その美しさをいち早く全国に紹介。その後も青森の自然を愛し、晩年には蔦温泉に本籍を移しました。県内における桂月の足跡をたどるとともに、作品に描かれた明治から大正の青森の風景を今と重ね合わせて紹介します。

常設展示室展示替え

平成二十五年度春から以下の文学資料を新たに常設展示します。

◎北畠八穂―原稿「小説太田幸司―ペガサス号―」

◎高木恭造―原稿「わが回想　困った医者」

◎太宰治―書額「思ひ煩ふな空飛ぶ鳥を見よ播かず刈らず蔵に収めず」

文学ビデオ

「大町桂月が描いた青森県」完成

上段の企画展概要でも触れましたが、大町桂月は青森県の自然を愛し、多くの足跡を残した文人です。今日、県内に存在する大町桂月関連の文学碑の数は四十を越えます。それらの碑を桂月の旅の足取りに近い形で配列し、網羅的に紹介するビデオを作成しました。ホームページ上での公開も予定しています。

特別展「鳴海完造と秋田雨雀」開催の記録

会期　平成二十四年七月十四日（土）～九月九日（日）

一九二七（昭和二）年、革命十周年記念祭に招かれた秋田雨雀は、同郷の若きロシア文学研究者鳴海完造を連れ、ソ連に渡りました。翌年雨雀は帰国しますが、完造はそのまま残り、九年間ソ連に滞在し、諸種の異本などを収集しました。生涯をかけて収集したロシア語の貴重な資料は、現在一橋大学附属図書館に収められ、「鳴海完造文庫」として保存されています。

本展では、秋田雨雀没後五十年にあたり、鳴海完造が収集保存していた新資料を中心に、二人の生涯と交流、業績を紹介しました。

本展の開催にあたっては、秋田雨雀記念館、黒石市教育委員会、一橋大学附属図書館をはじめ関係各位の御協力によって展示を実現することができました。

本展では、秋田雨雀と鳴海完造の生涯の概説、二人の交流、二人が残したものの四つを柱に構成しました。

今回展示した二五〇点の資料の中でまず目をひくのが、雨雀が戯曲「手投弾」の一節を書いて完造に贈った、畳一畳ほどもある書軸です。生涯にわたる二人の交流を物語る資料です。

また、中村喜和氏の御協力を得て、完造の滞ソ時代の日記とアルバム、収集した貴重な図書十六冊を解説付きで展示できたことは、大きな成果でした。例えば、本文の各場面を十二葉の版画で描いたトルストイの『人は何で生きるか』は、一冊でローケースを占領する大型本で、他の十五冊と共に旧ロシアの本の素晴らしさと数奇な来し方を思わせます。

さらに、黒石市立追子野木小学校の児童が制作した「卒業記念版画カレンダー秋田雨雀物語」も素晴らしいもので、児童文学作品を多く残した秋田雨雀がこれを見れば、どんなに喜んだことだろうと思われます。

このほか、多彩な活動をした秋田雨雀の作品からは、ロシアに関するものを中心に、図書・雑誌・書軸・色紙・短冊・原稿等を、生涯にただ一冊『ロシア・ソビエト姓名辞典』を残した完造については、原稿や遺品を中心に、雑誌「胎盤」やロシアの人々との交流を示す書簡等を展示しました。

開会式後の展示解説の様子

開会式では、鳴海完造の御長女工藤貴子氏、佐藤義弘秋田雨雀記念館長、川村進青森県近代文学館長によってテープカットが行われました。

図録には工藤正廣氏の「時代を越える事実と物語に寄せて」をはじめ、舘田勝弘氏「秋田雨雀の生涯」、鈴木喜代春氏「秋田雨雀先生と『みつばちの子』」、佐藤義弘氏「雨雀・要吉・そして完造」、中村喜和氏「鳴海完造さんのこと」、工藤貴子氏「私のなかの父」、太田丈太郎氏「『学問』の方法論―鳴海完造日記について」と多くの方々から寄稿いただき、ロシア文学を中心に雨雀と完造の生涯と業績を幅広く紹介するものとなりました。

会期中には、県内外から約三〇〇〇人に来館いただきました。

第一回文学講座　八月十二日（日）

県立図書館集会室、参加47名

・「鳴海完造のロシア留学とコレクション」

中村喜和（一橋大学名誉教授）

第一回文学講座　講師　中村喜和氏

紙芝居「鶴の湯物語」実演会

八月十二日（日）

県近代文学館ロビー

山口つぎ子（黒石市教育委員会社会教育課嘱託）

第二回文学講座　八月二十六日（日）

県立図書館集会室、参加57名

・「鳴海完造と秋田雨雀」

三上強二（青森ペンクラブ会長）

・「秋田雨雀とその風土」

斎藤三千政（弘前医療福祉大学准教授）

（飛内文代、青森県近代文学館室長）

特別展記念「講演と朗読の会」

講演と朗読の会　七月二十九日(日)
青森県総合社会教育センター
参加者66名

記念講演
「終わりしソヴィエト・ロシアの夢―雨雀・完造先生の理想」
工藤正廣（北海道大学名誉教授）

朗読
「秋田雨雀の世界をきく」
佐々木照代・五十嵐米子・久慈美津子（十和田点訳・朗読奉仕会）

特別展を記念して、詩人でありロシア文学者でもある工藤正廣氏の講演と、十和田点訳・朗読奉仕会の皆様の朗読で秋田雨雀の作品を鑑賞する会を開催しました。

前半の記念講演では、秋田雨雀・鳴海完造と同じく黒石の出身である工藤正廣氏が、雨雀や完造の思い出と、昭和二年からスターリン時代に至るソビエトの社会状況、完造と詩人アンナ・アフマートワとのかかわりなどロシアの人々と文学について語ってくださいました。

とりわけ、津軽の研究者を岩木山に例えて、まん中の岩木山が柳田泉、左の鳥海山が小山内時雄、右の巌鬼山が鳴海完造と、それぞれの仕事と人柄を整理されたのには、参観者も納得の表情でした。

後半は、佐々木照代さん、五十嵐米子さん、久慈美津子さんが、三人でナレーションと朗読を交替しながら、雨雀の生涯に沿って、詩「剣」・「青森埠頭の歌」、童話「ネプタ祭り」・「めくらの詩人の物語」、詩「春を告ぐモスクワ河の流氷」を紹介。雨雀最後の詩「もっと明るい太陽を」で締めくくった後、工藤正廣氏の詩集『ロシアの恋』から、雨雀と完造の思い出を詠んだ二つの詩を紹介するサプライズもあり、素晴らしい朗読で、好評のうちに閉じることができました。

記念講演　講師　工藤正廣氏

朗読　久慈美津子氏、五十嵐米子氏、佐々木照代氏

全国文学館協議会共同展示「文学と天災地変―青森の文人たちの残したもの」

平成二十五年三月一日から三月三十一日まで常設展示室において、全国文学館協議会共同展示「文学と天災地変　青森の文人たちの残したもの」を開催しました。

本展は、全国文学館協議会加盟館中の三十九館（追加参加二館）が、「文学と天災地変」という共通のテーマにより、各館の持ち味を生かした展示を3月にいっせいに開催するもので、全国文学館協議会としては初めての試みです。

あの日から二年、今、文学館として何かできないか。これまで天災地変に直面した人々が何を思い、文学がどう表現したかを紹介することで、少しでも力になれないか――このような思いからスタートした企画です。

当館では、「青森の文人たちの残したもの」と題して、地震や津波、飢饉など自然の脅威や過酷な現実を見つめ、青森の文人たちがどのように生き、どんな作品を残したか、図書や原稿等で御紹介しました。

展示は六つのケースで構成しました。

1　関東大震災と13人の作家
2　福士幸次郎と方言詩
3　柳田泉のターニングポイント
4　秋田雨雀の日記と作品
5　凶作と飢饉――高木恭造・三浦哲郎
6　津波――村次郎・三浦哲郎・長部日出雄・鈴木喜代春

このうち「津波」のケースに展示した村次郎の詩の原稿「津波」は、村が詩の発表を断念しても守ろうとした石田家旅館が、平成二十三年三月十一日に被災し、七月に取り壊されたことを考え合わせると、心穏やかではいられません。

苦難の中から、それでも先人たちは多くのものを私たちに残してくれたと改めて感じます。

（飛内文代、青森県近代文学館室長）

会津・斗南藩の概要

葛西　富夫

一、「会津葵」の崩壊

倒幕運動が激化した文久二年（一八六二）、幕府は無法地帯と化した京洛の地（京都）を鎮め、孝明天皇の宸襟を安んじ奉るために京都守護職を置くことにした。だが、その職責は国家の存亡にかかわるもので、藩の滅亡の危険性を内在したものであったために就任を打診された尾張・紀伊・水戸の徳川御三家はいずれもこれを固辞した。

そのため、幕府は葵の紋（「会津葵」ともいう）を許され、徳川御三家に次ぐ家格を誇っていた親藩大名の会津松平家二十三万石（初代藩主保科正之は徳川二代将軍秀忠の庶子に当たる）に白羽の矢を立てた。結果的に京都守護職を押し付けられた九代藩主松平容保は、早速、藩士を率いて上洛し、以後、公武合体の第一線に立って藩の全力を投入して京都の治安維持に努め、孝明天皇の宸襟を安んじ奉った。つまり、当時の会津藩は全国三百余藩の中で、最も勤皇の志が厚かったのである。

ところが、この動きが災いして会津藩は運良く錦旗を戴くことに成功した薩長両藩を主軸とした西南諸藩から「朝敵」・「逆賊」の汚名を着せられるという結果を招いた。そして、慶応四年（一八六八）一月三日に勃発した鳥羽・伏見の戦い以来、西軍〔俗に「官軍」ともいう〕の集中攻撃を受け、徹底的に討たれた。その後、西軍北上の過程で奥羽越列藩同盟の成立や瓦解などがあったが、会津藩は常に幕府側の最強の抵抗勢力と見做されて百数十回の戦闘に巻き込まれ、同年八月二十三日には鶴ヶ城の籠城戦に突入した。

こうして、会津藩は鳥羽・伏見の戦いから九月二十二日の鶴ヶ城の落城までの間に二千九百七十七人（『会津殉難者名簿』による）の戦死者を出し、城下の三分の二を焼失して降伏した。籠城戦展開中の九月八日には、会津人の行く末を暗示するかのように「慶応」は「明治」と改められていた。ともあれ、降伏後の会津人は藩主松平容保以下全戦闘員が謹慎を命じられた。降伏後の会津人にとっての救いは、白虎士中二番隊員の自刃や娘子隊の奮戦、婦女子の自決などが「会津の至誠」として語り継がれるようになったことぐらいであったろう。

二、会津松平家の再生

明治二年（一八六九）五月十八日、旧会津藩家老萱野権兵衛が戊辰戦争に関わる藩の責任を一身に背負って切腹した。これを契機に新政府の会津松平家に対する姿勢が変わり、同年十一月三日には六月三日に生まれた松平容保の嗣子慶三郎（元服して容大と名乗る）を以って旧盛岡藩領（二十万石）のうちの北郡〔七戸藩領（一万一千石）を除く現在の青森県上十三地区とむつ下北地区〕・三戸郡〔八戸藩領（二万石）を除く現在の青森県三八地区〕・二戸郡〔現在の岩手県の一部〕の三郡にて三万石の支配を許された。このほか、蝦夷地北海道の四郡も支配することになったが、いずれも農業授産の面では全く期待できなかった。事実、本州に位置する北奥の三郡について見ても、二、三年に一回は「ヤマセ」（偏東風）に叩かれ、穀物と言っても稗や粟が主で、しかも年間の「物成」は米や金銭に換算しても「七千五百石、金三千両の見積もり」に過ぎなかった。

ともあれ、会津側では藩名を「斗南」と号することにし、明治三年四月に旧盛岡藩五戸代官所に斗南藩庁を開設した。「斗南」の語源についてはいろいろな説が考えられるが、下北地方の地方史研究家笹沢魯羊翁が発表した中国の詩文にある「北斗以南皆帝州」説が有力である。

この地に同年春から晩秋にかけて海路や陸路をたどり、敗残の難民二千八百戸・一万七千三百人余（推定）が移った。移転者は新政府から藩に支給された一日一人三合の扶持米を頼りに押布（海草を刻んで干し、凶作に備えたむつ下北地方特有の食料）や山菜のみならず、柔らかい野草はなんでも茹でて胃袋に押し込んだために地域住民から「会津のゲダガ（毛虫の方言）」と言われたりした。食生活さえもままならなかったために、斗南移転早々の明治三年の冬から翌四年にかけて病人や死亡者が続出した。この事実は、旧斗南藩領内の各寺院の過去帳が如実に物語っている。

藩の指導者に推された権大参事山川大蔵（浩）や少参事広沢富次郎（安任）・永岡敬二郎（久茂）らはまず「職制」を整え、「自主の民」として向上発展するために次のような施策を講じた。

① 藩校日新館の再開

現在のむつ市田名部に日新館を開き、更に田名部や五戸・三戸には分校に当たる漢学校を設け、それぞれの漢学校の下に合わせて計十個所の分局を置いた。

② 農業授産所や救貧所の開設

田名部郊外の斗南ヶ丘をはじめ領内各地に農業授産のための入植地や手仕事の技術を授ける救貧所を開設した。

③ 中国との交易計画

藩の財政を確立するために中国との交易を計画し、明治四年二月に藩庁を五戸から自然の良港に近い田名部の吉祥山円通寺（曹洞宗）に移し、大湊港を「奥羽の長崎」に仕立て上げようとした。

三、青森県誕生の背景

藩の指導者は捲土重来を期すための施策を進めつつあった。ところが、明治四年七月十四日、廃藩置県が断行され、斗南藩をはじめ、弘前・黒石・八戸・七戸の各藩もそれぞれ県と称した。これは、

新政府が幕藩体制を完全に解体して中央集権政治の実を上げることを目指したものである。

山川浩や広沢安任、八戸県大参事の太田広城らは次に政府は各県の広さや財力などを勘案して全国を整理統合するであろうと考えた。そこで、津軽と南部との間には弘前藩の始祖津軽為信以来の確執があったことを無視し、弘前県とその支藩であった黒石県（一万石）との合県運動を進めた。津軽は稲作が盛んで、しかも弘前県は旧藩時代には十万石であったものの戊辰戦争の際の功労によって三年間一万石加増され、政府の覚えが良かったからである。

以後、広沢は太田広城と手を組んで、前から知己であった内務卿大久保利通らに猛運動を展開した。これは間もなく功を奏し、同年九月四日、黒石・斗南（岩手県二戸郡金田一以北はのちに岩手県に併合）・八戸・七戸の四県に館県（旧松前藩一万石～のちに北海道開拓使に併合）を加えた五県は弘前県に併合され、県庁は弘前城に置かれた。続いて、九月二十三日には県庁は青森にあった弘前藩時代の御仮屋（現在の青森県庁所在地）に移されて青森県庁と改められた。これを契機に、会津人の多くが斗南の地から会津や東京をはじめとして全国各地に移っていった。

広沢らの合県運動がなかったとしたら津軽地方は秋田県に、南部地方は岩手県に併合されるなど、青森県地図は大きく変わっていた可能性がある。

四、会津人の足跡

斗南藩は一年数ヶ月にして消滅し、わが国の近代史にわずかに痕跡をとどめたに過ぎない。だが、当地に残留した会津人は、教育文化や地方自治、産業経済の分野のみならず精神面に至るまでさまざまな影響を与えてくれた。

まず、教育面では明治六年（一八七三）の公立小学開設以降、多数の斗南関係者が教壇に立った。彼らは周囲の人々に「会津の気風」も伝えてくれた。

また、地方自治の面でも市町村の首長や吏員、地方議会の議員として地域の発展に貢献した。最近でも、会津の血を引く首長として北村正哉元青森県知事や菊池渙治元むつ市長、鈴木重令元三沢市長・杉山肅元むつ市長らが知られている。

更に、産業経済面でも百石村谷地頭（現三沢市）に洋式牧場開牧社を開いた広沢安任をはじめ、地域の経済基盤を確立させるために活躍した関係者も多い。

全国に移転した会津人の中でも教育文化や政治経済、国防など各界で努力し、名を知られるようになった者も枚挙にいとまがない。中でも、斗南藩の権大参事として苦悩した山川浩（東京高等師範学校長・陸軍少将・貴族院議員・男爵）は特筆に値する。

現在でも全国各地に会津関係者末裔による会津会があるが、青森県内にも斗南会津会（むつ市）や十和田会津会・三八会津会などがあり、会津士魂を今に伝えている。

（かさいとみお・郷土史家）

「斗南藩と文学」開催報告

企画展「斗南藩と文学」を四月二十八日（土）から六月十日（日）まで開催しました。先に掲げた文章は、斗南藩研究の第一人者である葛西富夫氏から、パネル原稿として御寄稿いただいたものです。

本企画展では、斗南藩（となみはん）の人々が残した文化的遺産や斗南藩を題材とした書物の数々を紹介しました。

三沢市先人記念館からは広沢安任の直筆本『牧牛書』ほか計二十二点、むつ市教育委員会からは松平容保の書「天錫烟霞」ほか計十七点の資料を御出品いただきました。このほか、むつ市立図書館からは藩校日新館で用いられた教科書を、また県内在住の個人の方から広沢安任の漢詩幅や著書をお借りしました。

自館資料としては山川浩の歌集『さくら山集』や東海散士の漢詩幅を公開、総資料点数は二三八点でした。会期中二二六四人の方に足をお運びいただきました。五月十三日には「文学作品に見る斗南藩」（竹浪担当）、五月二十日にはｎｐｏ法人アートコアあおもり理事長の佐々木高雄氏をお招きし「もう一人の志士」と、二度の日曜講座を開催しました。

（竹浪直人、青森県近代文学館主事）

東海散士の漢詩幅

スポット展示開催

貴重であるがゆえに、展示機会の少ない資料を、期間限定で公開する「スポット展示」を今年度から始めました。

太宰治自筆資料展～万年筆（エバーシャープ）と原稿～
6月16日（土）～7月1日（日）

自筆資料でよむ寺山修司～原稿「セールスマン博物誌」～
9月15日（土）～9月30日（日）

石坂洋次郎「マヨンの煙」～フィリピンルソン島従軍記～
12月8日（土）～12月24日（月）

ミニ展示
「文学館スタンプラリーのあゆみ」
平成25年1月5日(土)～1月27日(日)

作年度から、展覧会等に際し、職員手作りのケシゴムはんこによるスタンプラリーを実施、来館者の好評を得ています。これまで作成した作品を展示し、活動を振り返りました。

二人をつないだ津軽の血

加藤　丈夫

一九二七年の春、「少年倶楽部」編集長の加藤謙一は郷里弘前の大先輩である佐藤紅緑を兵庫県鳴尾の自宅に訪ねた。

当時の紅緑は飛ぶ鳥を落とす勢いの流行作家だったが、初対面の謙一を温かく迎え入れ、かって親交のあった謙一の父忠吉の思い出などを楽しそうに語った。しかし、謙一が「今日は『少年倶楽部』に小説を書いていただくお願いに伺いました」と切り出した途端、紅緑の顔が怒りで真っ赤になった。

「この俺に洟垂れ小僧の小説を書けっていうのか。俺は大人が読む小説しか書かないんだ。見損なうな！」

謙一はあまりの剣幕にびっくりしたが、しばらくの沈黙の後に言い放った。

「先生、子供の雑誌に小説を書いていただきたいとお願いするのはそんなに失礼なことですか。子どもは国の宝ですぞ。子どもが良くならなければ日本は良くならないでしょう。私は子どもたちのためになる本を作ろうという一念で故里を飛び出してきました。先生の小説を読んで『この方なら』と思っていましたが、これではお話になりません」

それを聞いていた紅緑は「そうか、考えておこう」と答え、その日は気まずい雰囲気のまま別れることになったが、十日程経って突然紅緑から一言「題が決まったよ。『あゝ玉杯に花受けて』だ」と電話があった。

こうして「少年倶楽部」の名声を不動のものにした小説が誕生したが、「玉杯」の連載が始まると、編集部には全国の教師や父兄から「こんな小説を待っていたのだ」という電話や投書が殺到し、「少年倶楽部」は発行部数を一挙に五割も増やすことになった。

左端佐藤紅緑、右端加藤謙一（撮影年不明）

これを機に、紅緑と「少年倶楽部」との縁が深まり、「玉杯」に続いて「一直線」や「少年讃歌」「英雄行進曲」などの名作を発表し、いつの間にか本人が軽く見ていた少年小説作家として後世に名を残すことになった。

それからの紅緑は二十二才年下の謙一に対して、温かい慈父のような態度で接し、編集者としての心構えや「少年倶楽部」の仕事について何くれとなくアドバイスした。

その一つに、紅緑が読者によせた「陽気に元気に生き生きと」という言葉は、そのまま「少年倶楽部」のキャッチフレーズとなった。

また、紅緑が謙一に「もっと漫画を載せたらどうか。漫画は家中皆で読めるし、何より誌面が明るくなるからね」と話したのがきっかけとなって、「少年倶楽部」には「のらくろ」や「冒険ダン吉」など一世を風靡する人気漫画が登場することになる。

そしてその流れは、戦後謙一が創刊した「漫画少年」に受け継がれ、そこから手塚治虫をはじめ寺田ヒロオ、藤子不二雄、赤塚不二夫、石森章太郎など戦後を代表する漫画家たちが生まれ育つことになった。

謙一は紅緑から与えられた「車の功を言う。轂（こく）は与らず」という言葉を座右の銘としていたが、その意味は「世の中は目立たなくても大事な仕事をしている人によって支えられている。作家は車の輻（や）のように世間からもてはやされるが、編集者は車の中心にあって回転を支えている轂にあたるのだ」ということである。それは全身全霊をかけて編集の仕事に打ち込んでいる謙一に対するこの上ない激励の言葉であった。

こうした紅緑と謙一の親交は戦後も変ることなく続き、更に紅緑の子どもたち―サトウハチローや佐藤愛子との交流にもつながっていくことになる。

紅緑は一九四九年に亡くなるが、佐藤愛子の小説「血脈」の中には、紅緑の遺言稿に「余の死後諸事万端を託すべき人」として謙一の名前が書かれてあったとある。

劇的な初対面から二十年、作家と編集者という関係を超えて紅緑と謙一を濃密に結びつけたのは、二人の中に流れている同じ津軽の血であったに違いない。

（かとうたけお・加藤謙一　四男）

少年達が熱狂した「少年倶楽部」